

113

大要

明治四十一年四月二十四日

大港務部司令官玉利親賢

海軍大臣男西村實藤實毅



四年

濟

軍務局

艦政本部

軍令部

第三部
第四部
會計課

海軍大臣男西村實藤實毅
肥後艦隊艦首損害報告一件

本月十日當部所屬汽船北洋丸青森湾ヨリ入港 艦首ハ由
際暴風、為メ壁流セル風下、碇泊セル 肥後艦隊ノ艦
首ニ觸接レ別紙圖面ノ如キ損所ヲ生セリ因テ當時ノ
狀況ヲ精細調査セシメ別紙知港事白石直竹提出ノ由書
如ク北洋丸ヲ指揮中島上等兵曹ハ當時ノ天候悪劣スル
豫メ艦分ル注意ヲ拂ヒシ事備ラズ存也 取未留セルトスル
際ノ突然強吹北西ノ風、為メ遂ニ壁流セルタルモノ

第一班

0283

ニレテ事實止ムラ得サレノアツ
認ム

右報告ス

(別紙) 知港事報告
船長報告

写レ右通添付

(終)

洋
頁

0284

寫

大要知第八號

明治四十三年四月二十三日

大湊要港部知事 白石直升

大湊要港部司令官 玉利 物堅 殿

船隻 觸接 損傷 届 仰

去ル十日北洋丸定期船トシテ青森港ヨリ入港 敷島留ノ
 際 暴風ノ為メ操縦ノ自由ヲ失ヒ敷島留 不可能ナルヲ以テ
 浮標附近ニ投錨シタルモ直ニ走錨シタルヲ以テ汽機ヲ運転シ
 安全志位ニ至ラントセシモ充令ナル餘地ナク走錨ノ後遂
 ニ船隻 船體・觸接シ其船首ヲ屈曲セシメタリ 右北洋水
 指揮中島上等兵曹ノ報告ニ依リ調査シタル時ト觸接
 シタル左記理由ニヨリ當時ノ天候於テハ事突止ムヲ得ザルノ

毎

頁

0285

ト認メテ

右御届ス

理由

當日の朝未南西ノ風強吹レ凡向次第ニ西方ニ變レ漸次其力
 ヲ増シ北洋丸入港ノ際ハ其極度(風力)ニ達セリ同船ハ
 天候険悪ノ為メ錨留不可能ノ地合、船員ノ為メ豫メ右船
 錨ヲ用意シ左船錨鎖ヲ以テ錨留ノ用ニ之ヲシテ浮標ニ近
 ケリ時、北西ノ風ハ一變ノ暴力ヲ以テ右船ノ強暴ニ為メ
 浮標ノ船索ヲ断リ得ス南東ニ一壓流セラル、右船ノ直ニ
 右船錨ヲ投下セリ然レ船首ノ風向ニ立ツノ違ナリ右船
 リ風ヲ受ケテ横壁走錨ス、右船ノ汽機ヲ運転シ安在ナル位
 至、至リントセシモ其周圍ニ輕船ノ錨留スアリテ先分ナル餘
 地ヲ添、船尾ノ以テ風下、錨留レん時、船首ニ觸接レ

其艀首ヲ屈曲セシメタルノ外他ニ損害ナク漸ク危地ヲ脱シ
 宇田湾口附近ニ至リ双錨泊シテ約ニ時間及治上ノ
 カノ稍衰ムルヲ以テ投錨ニ固有浮標ハ敷留セリ
 以上ノ事實ニヨリ推断スルニ當リ天候不良ノ為メ吾大ノ困
 難ヲ凌キ充分ナル注意ヲ拂ヒテ入港シ得ル敷留セトスル際
 不幸ニモ北西ノ風ノ為メ操縦ノ自由ヲ失ヒ走錨一盤流
 セラレテ錨ニ觸接シ其艀首ヲ屈曲セシメタルニ當リ天候
 際ニ扶墜ナル敷留地ニ於テハ事實止ムヲ得サレト認ム

(終)

海軍

0287

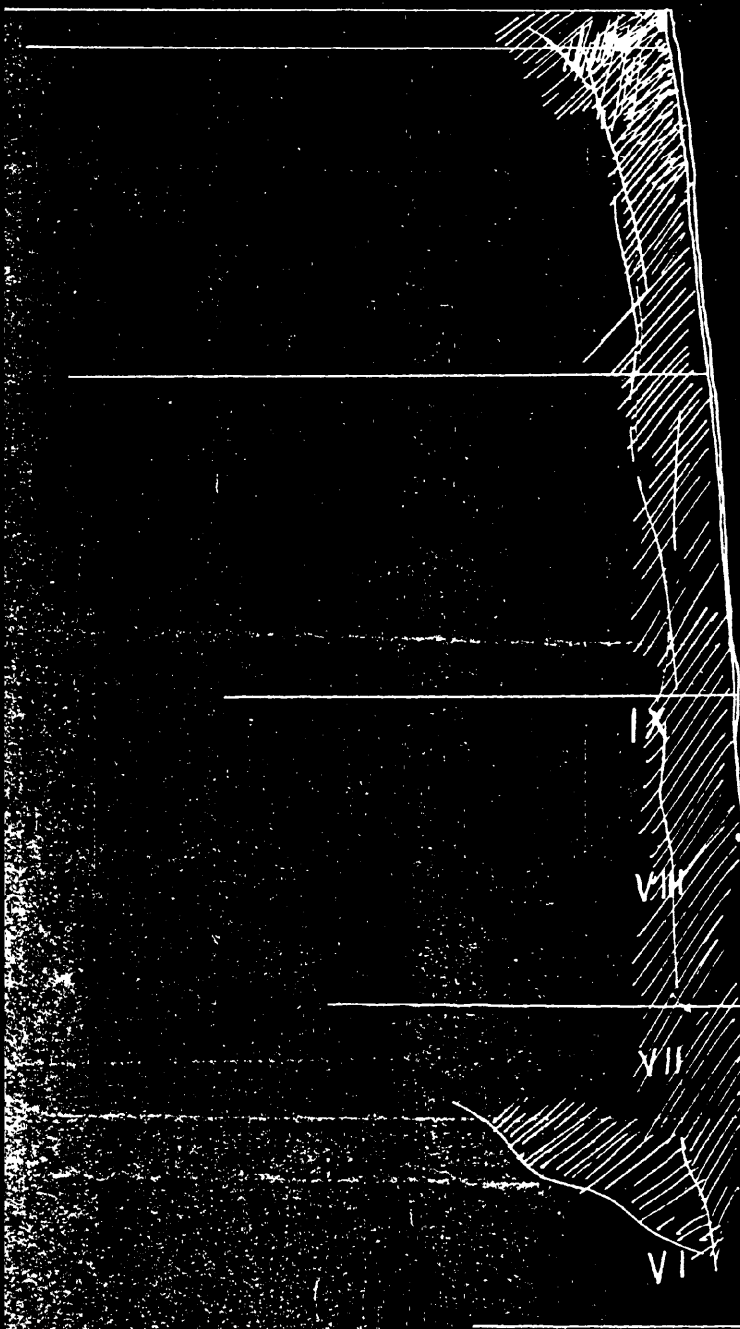
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

道

自

0288

駭逐艦脆破損個所見取



0289

寫

四配第五三號

明治三十四年四月十五日

第四配逐隊司令松岡修考

大連要務部司令官玉利親監殿

配逐艦隊損害報告一件

配逐隊長海軍大尉堀 音揚 同配逐隊損害

報告

右 准 詳 云

(別紙中添)

檢

海軍

寫

晴機密第三〇號

明治四十二年四月十一日

晴駝逐船長

堀

音

第四駝逐隊付左松岡修藏殿

駝逐艦隊被擄案報告

明治四十二年四月十一日午後一時三十分本船大槓要港に於

一區碇泊中今要港部所屬北洋丸入港し来り本船ノ

西約四百五突ニ見浮標ニ敷留エテ際レ折柄西向(西カ

六乃至七)強カレテ為メ北洋丸ハ敷留作業ヲ仕損レシムルカ

風下ニ壓流セムルニテ如シトノ本船當直水兵ノ報告ニ依リ

直々ニ總負ツ前部、集友ニテ避難ヲ面リシ風力強大ナク

以テ北洋丸ハ船首ヲ南方ニ向ケテ、本船首尾線ニ約直南

ニ壓流シ来リト云ヒテ錨錨ヲ正ニカセトセシモ當時錨

毎

頁

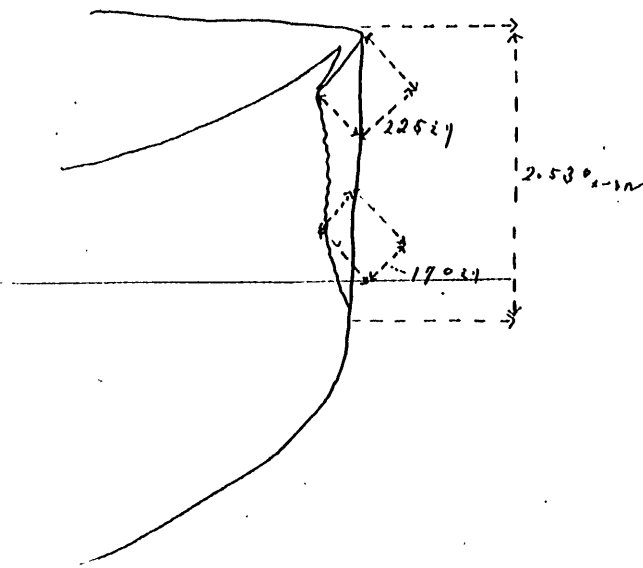
0291

治ラレテ、^ノ也ツ肥家、^ノ艦雷、本艦直后、縦列ニ、^ニアリ、^ノ錨鎖ヲ
 近ハスト、不可ナク、^テ防艦物、及田村ヲ備ヘ、^テ北洋丸ヲ衝キ
 張ルノ手段ヲ講シ、^リカ、^カ強烈ナル北洋丸ノ、^ノ壓流ハ、之ヲ支フ、^ト
 能ハス、^ニ北洋丸ノ、^ノ艦首部ヲ以テ、^テ本艦艦首部ヲ縦
 ニ、^ニ五三ノ米、^ノ首尾線ノ長、^ヲ於テ、^ニ百七十、^ノ耗乃至、^ニ百二十五、^ノ耗ヲ、^ノ右方、^ニ
 約直角ニ、^ニ屈折セシメ、^リ其大畧附圖、^ノ如レ
 右、^ノ教書ス

(終)

附
圖

船首損害部異圖



0293

新刊 軍務

供覧

軍務第八

軍務局長 中溝

尚書



明治三十三年五月二十三日

午後四時

大東亜海軍

海軍大臣 東郷平八郎

海軍省 海軍大臣 東郷平八郎

海軍省 海軍大臣 東郷平八郎

海軍省 海軍大臣 東郷平八郎

海軍省 海軍大臣 東郷平八郎

海軍省 海軍大臣 東郷平八郎

海軍省 海軍大臣 東郷平八郎

海軍省

海軍省

海軍省

0294

↑

							日心堂報告提出せし原稿を 抄録したる由に付し 希有なりとす		
							3		

箱谷納

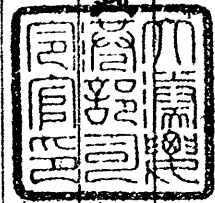
0295

海

大漢機運第九一號

明治四十三年六月二十二日

大漢要港部司令官玉利親賢



海軍大臣男海尉齋藤 實殿

北洋丸觸接事件ニ関スル件

明治四十三年四月十日北洋丸が駆逐艦龍ノ觸接シ同艦ノ首ヲ損傷セル事件ニ就キ査問委員會ヲ組織シ調査セシメシニ別紙ノ通り査定セリ本職ハ此ノ事ニ同意シ責任者ヲ懲罰スヘキ旨當敷設隊司令ニ令達セリ

右報



査定書及關係書類一括添付

小林



終

司法局

局員



海

軍

人事局



接
送
二
月
廿
二
日

0296

軍令部	水路部	臨時建艦部	教育本部	艦政本部	司法局	經理局	醫務局	人事局	軍務局	大臣官房	部局名
-----	-----	-------	------	------	-----	-----	-----	-----	-----	------	-----

手
書

官
署

陸
軍
省

魚
せ
し
メ

白
フ
徴
心

昭
和

終

0296

部局名	接受月日	發送月日
大臣官房	六 月 五	六 月 五
軍務局	六 月 五	六 月 五
人事局	六 月 五	六 月 五
醫務局		
經理局		
司法部	六 月 五	六 月 五
艦政本部	六 月 五	六 月 五
教育本部		
臨時建築部		
水路部		
軍令部	七 月 八	

0297

北洋丸觸接事件ニ對スル査定書

明治四十二年四月十日北洋丸が駆逐艦朧ニ觸接シ同艦々首ヲ損傷セル事件ニ就キ査問委員會ニ於テ査定スルコトカノ如シ

一北洋丸が駆逐艦朧ニ觸接シ同艦々首ニ損傷ヲ與ヘタル事實ニ就キ調査セルニ今日午後〇時三十分北洋丸ハ定期船トシテ青森ヲ大湊港内ニ入港ノ處當日朝来南西ノ風強吹シ風向次第ニ西方ニ變シ漸次其力ヲ増シ同船入港緊留セントスル際ハ其極度ニ達シ風力五乃至六ヲ示セリ然レモ同船指揮海軍上等兵曹中島長次郎ハ當時ノ天候ニ就キ港口葦崎附近ノ模標ニテハ全ク入港シ且ツ緊留シ得ル程ノモノト作スト思考シ九艀錨鎖ヲ以テ緊留準備ヲナシ同時ニ緊留不可能ノ場合ニ處スル爲ノ右艀錨ヲ用意シ同船浮標ヲ九艀ニ見ル如ク

海

軍

0298

進行シ浮標ニ近接シテ停止セリ時ニ北西ノ風ハ一般ノ暴カラ以テ右舷ヨリ
 強襲シ爲メ浮標ノ船索ヲ取ルヲ得ス南東方ニ壓流セラルヲ以テ而
 右舷錨ヲ投下シ錨鎖約ニ節ヲ出シ船首ヲ風向ニ立メシメ然レ
 後再び錨ヲ留セシト決意セリ然レニ船首ハ風向ニ立ワコトナク右舷ヨリ
 風ヲ受ケテ、櫓壓走錨スルヲ覺リ更ニ錨鎖ヲ延長セシトセリ時已
 ニ遠ク風下ニ投錨セル船首ヲ距ル遠カラサリシニ依リ止ムヲ
 得ズ洗機ヲ運轉シ後進スルヲ安全ニ位置ニ至ラシトセルモ充令ナ
 餘地ナシ遂ニ九般船楫前部ノ部ヲ於テ斷リ船首ニ觸接シ其繼
 首ヲ縦ニ五言ノ米ノ首尾線ノ長サニ於テ百七十耗乃至二百五十耗ヲ右
 方ニ約直角ニ屈曲セシメタルモノナリ

以上ノ事實ハ海軍大村城、海軍上等兵曹中島長次郎、海軍
 一等兵曹及川甚吉、海軍一等兵曹近藤修三、海軍三等兵曹秋元
 松五郎、海軍二等水兵鏡勝次郎、知港部舟夫佐々木勝次等

0299

参考人尋問調書及大湊要港部知港事白石直久ノ船艇觸接
 損傷届書、船艇運送長城船ノ被損害報告書、當時ノ船艇
 艇碇泊位置図并、査問委員が審査セル所ヲ綜合シテ確實ナリトス
 二、右事實、擧り之レガ原因ヲ按スルニ當時ノ天候ハ數果留作業ニ対
 シテハ尤ヨリ困難ノ事ナリト雖余ク不可能ナリト認ムコト能ハズ而シテ此
 洋丸指揮上等兵曹中島長次郎ハ相當ノ注意ヲ拂ヒテ入港
 シ得サニ數果留セシトスル際、北西ノ風ノ爲メ風下ニ壓流セシ爲メ浮
 標ノ船索ヲ取テ得サルニ至リ直ニ投錨シテハ適應ノ所置ナリトス然
 レトモ當時ノ天候ニ於テ投錨ノ際約二節ノ錨鎖ヲ出シタルノミテ之レガ走
 錨スルヤ否ヤラモ慮ラズ錨鎖ノ状態ニ注意ヲ拂フコト薄ク徒ニ风向ニ
 立チンコトヲ待テアル間ニ走錨シテアルヲ覺リ初メテ洗帆ヲ後退運
 轉シタルモノニシテ若レ投錨シタル後直ニ錨鎖ヲ充分ニ延ハシ且テ洗帆
 ヲ運轉シ风向ニ立シムルヲ助ケルカ又ハ當時ノ天候ニ鑑ミ入港ノ際兩舷

毎
 頁

錨共投錨用意ヲナシ敷留不可能ノ場合。當リ迅速兩舷錨並
使用シ得ル如ク準備シアリタラシム。斯ク如キ觸接ヲ避ケ得ベカリシ事
此ニ出テサリシハ觸接ヲ來シム原因ナリト認ム

三、右ノ事實ト原因トニ對シ責任ノ歸スル所及其程度如何ヲ按スル其
事實ニ對シ直接其責任スルハ當時ノ北洋九拵揮海軍上等兵曹
中島長次郎ナリ然レトモ臨時同船ノ指揮者トナリ同船ヲ關シ操縦
上未ク充分ナル經驗ヲ積ミ上乗兵曹トシテハ當日ノ天候ニ對シ相
當ノ注意ヲ拂ヒ處置ヲ施シタルニ係ラズ不測ノ強風ニ勃ラスル
ニ至リタル其狀情ハ誠ニ酌量スヘキモノアリト雖其事案ハ前項
ノ如ク已ムヲ得サル原因ニ依ルモノト云フヲ得スニテ畢竟職務上ノ過失
ヲ免レサルハ故ニ海軍懲罰令第九條第十号ニ該當シ今令第
十條第十條ニ據テ處断スヘキモノト査定ス

明治四十二年六月二十二日

0301

査問委員長 海軍大佐 近藤 常松

査問委員 海軍大尉 今橋 重良

令 令 堀田 文雄

令 令 佐々木 造 岡三

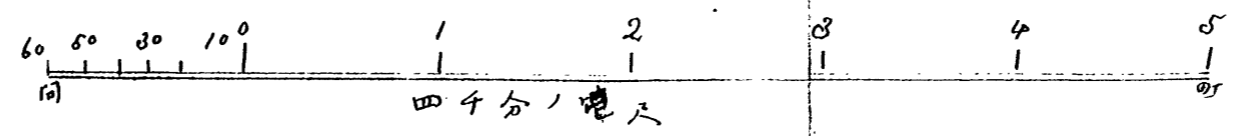
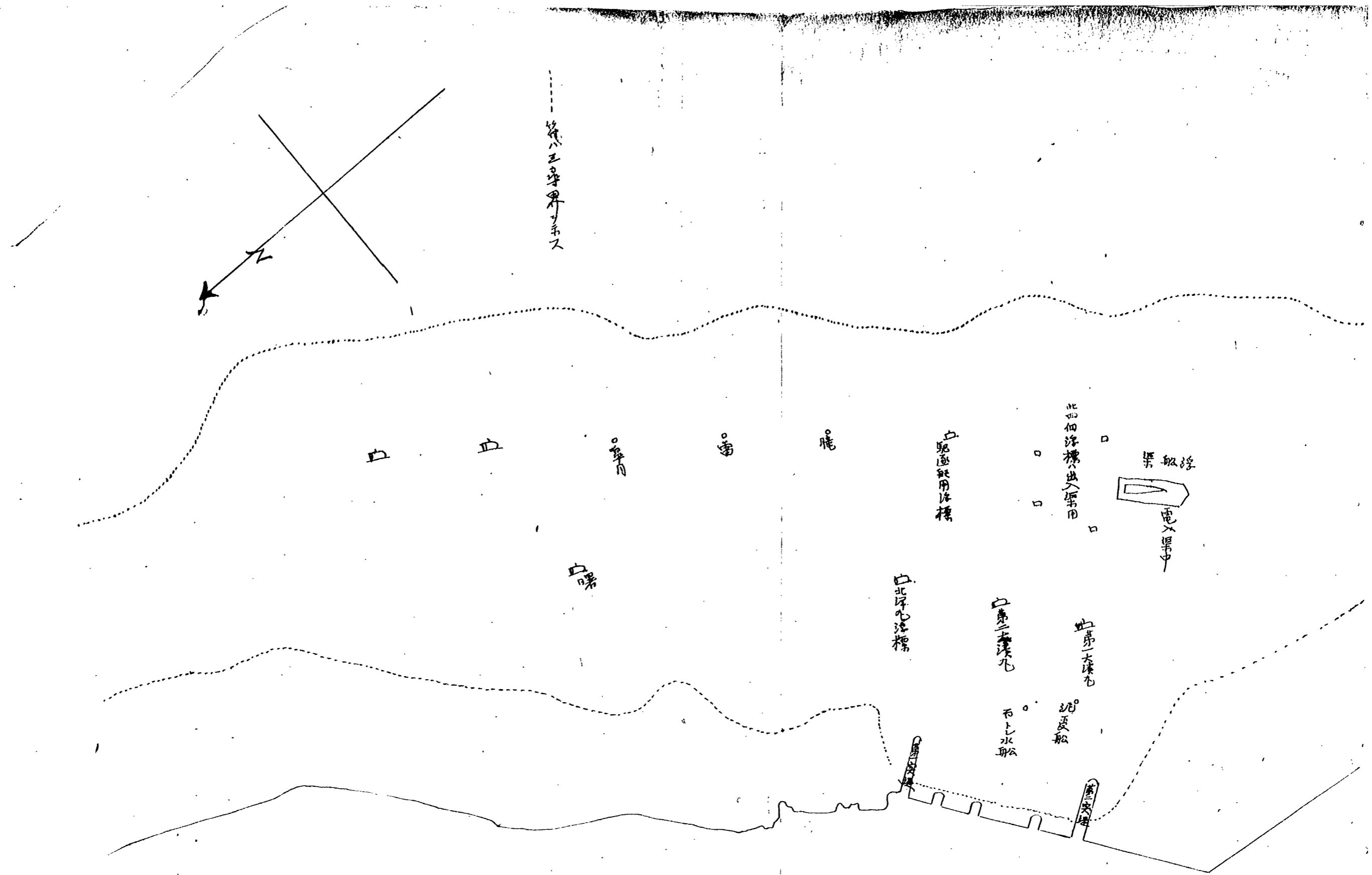
令 海軍中尉 多々谷 勝美

令 海軍中士 計齋 藤勝助

書 記 海軍上等筆記 金照 佐吉

海軍

0302



0303

明治甲午年四月十日也洋丸接觸事件查向浦書

艦砲隊艦長海軍大尉堀 爲

四月十日也洋丸ト接触ト接觸事件付尋問ス

同、其官官ハ出府時何ヲ爲シ居リヤ

答、士官室ニテ官事申テアリマシタ

同、其當時ノ横切ヲ誰也

答、食事ヤシテ居マシタガ傍番ガ如洋丸カ飯口近ワイテ来

ルト感テテ来マシタカラ早出テ見シト處也洋丸ハ本艦ト合

ノ浮標中間ニ本艦觸カラ約拾米突計リ處ニ来テ本艦

船ト約直角ニ合カ左舷ヲ刺スニテ次第ニ流シテ来マシタガ

0304

本艦に西舷錨ヲ投入シテ居ると故ケリブルシテ本号艦ハス
瞰カナイト思フタカラ止ムラズ衝突用意ヲシテ来ヌナラバ突
キ高ス用意ヲシラシム處ガ忽チシテ本艦錨ニ触レタリ
テ先キニ報告ノ通りノ損害ヲ受ケタリ

同、其ノ時時ハ洋丸ハドウシテ居タリ極ニ見エケシヤ

答、也洋丸ガ本艦ニ触レタリ時ハ右舷ニテ居タリ極ニ思ヒマス

而シテ左舷ノケリブルシカ下カテ居ラシムガ余リ垂道ニ下

カフテ居リマシムカラ錨ハ入ツテ居タリ極ニ見エケマセン實ハ

本艦モ「ケリブル」ニツク止バシテ居ラシムカラ「ケリブル」ニ

カポート心配シラシムガ其事ナシニ右舷デ出テ行キマシタ

同、其ノ時時其艦ノ碇均ク位置ハ如何ナリシヤ

東京北村納

0305

左、北風に風が強ク吹キマシムカウ。或番ブイノ船と西舷錨ヲ入テ左
舷ヲエツ右舷ヲニツ半にビテ由直キマシムカウ。寧日と云番ブイノ
江クニアツト思ヒマス

(驅込候碇仕位置に異同ヲテモセヨリ同幕ト云候付候)

同、當日ノ風ノ横候ハ如何ナリヤ

答、入港前ノ風ハ北西ノ横ト思ヒマス。且つ當時モ夫レガサテ西ノ
空ツツノ様デアリウシクガ山ノ下デモアリサレツノハ方位ハ変ツタ
カモ知シマセン。又風モ時々息サツイテ居リマシクガ先ツ風力
ハ六乃至七位ト思ヒマス

右之通相違ニ云々也

明治四十二年五月廿五日

0306

東京北村納
江戸
堀

東京北村納

0307

明治四十二年四月十日洋丸接触事件査同調書

驅逐艦隊司令官 水鏡 勝次郎

四月十日洋丸ト接触事件ト付尋問ス

向、其方ハ當時何ヲ爲シ居リシカ

答、當時ハ當時番デアリマシタカウ上甲板、居リマシタ

向、世洋丸ノ入港シテ来ルノヲ見テ居ッタカ

答、ハイ

向、世洋丸ノ入港后曉ト触レル迄ノ様様ヲ述セ

答、世洋丸ハ浮標ノ所ト行キマシタカ何デモ「ブイ」ヲ取り換ナシ

ト様デアリマシタソレト是レ内ニ錯ヲ入シタ音が聞ヘマシタ

海軍

決レカウ飯に奉^レ艦ノ方^レに寄^リソテ来^マスカウ 艦長^ト尾^ケ
 マシタ處 艦長 始メ士官室^{カウ}出^テ来^シマシテ 艦長^カ總
 員上^ヘ衝^突用^意ノ号^令ヲ 懸^ケシマシ^ラカウ 傳^令ヲシテ
 構^ヲ以^テ突^キ高^シカ^リマシタ
 同、世澤丸^ハ鎗^杖械^ヲカケタ 様^デナカ^ツタカ
 答、ド^モ分^リマ^セシ
 同、世澤丸^ハ鎗^杖入^レタ^リハ 何^處ト^思フ^カ
 答、音^ハ慥^カ聞^コマ^シガ 辨^ク分^リマ^セシ
 右^ノ通^相違^無ク^モ也

明治四年五月廿五日

佐野幸吉
 鏡 晴 治 郎

東京北村納

0309

明治四十二年四月十日洋丸接触事件査問調書

洋丸指揮 海軍上等兵中島長次郎

四月十日洋丸ト船ト接触事件ト付見付同ス

同、當日入港用意ハ何處ノ口ニテ令セシヤ

答、第一見張所ノ處ニテ令セシタ

同、入港用意ノ前、船ノ用意ヲナセシヤ如何

答、風が強カリシ故左舷船鏡ヲ外シ繫留用意ニシ在船

ヲ投入ノ用意ニシタシタ

同、繫留ノ際、舵置ヲ流セ

答、前甲板ハ水舌四人上ツテ居リ又内巻名ハ下士官テス

0310

向、物澤丸、性質ハ能ク兼知シテ居ルカ

春、先令トハ申サレマセシガ五六回ハ乗ツテ指揮シタカラ一週リ

ハ心付テ居ル積リデアリマス

向、世澤丸ノ舵ハ如何

答、能クキマセン右進ノキハ舵ガド一取ツテアツテモ船ヲ右程

ニ廻ハス僻カアリマス風ノ強キハ右進ノ舵ハ結リキカスニ

流サレマス

向、當時ノ風向風力ハ如何ナリシヤ

答、西テアリマシタ黒崎附近デハ強弱色々アラシタガ力ハ参

乃至四倍ト思ヒマシタ夫レ故繫船ノ決心ヲ殺シマシタ尤モ

風テアリマシタカラ夫レモ強ク五以上デアツタカモ知シマセ

東京北村納

0311

向 其時ヲ過キテカウハ如クナリシヤ

卷 其時ヲ過キテカウハ風ハ向シ極デ三本松ノ方カラ吹イテ居リマシ

タガカハ秋カ冬位カト思ヒマシタカウ矢張リ繫留スルコト定マ

レタガ浮標、繫留スル頃急激ニ下風ガ来マシタ何デモ晴

ノ度デも速ニシテ次テイ速ニシテ浮標ノ少シキホテ停

止シタ風ガ右舷「バウ」カラ吹イテ居リマシタカウ何時モ

ハ停止ヲ違フ教シマシタ船ガ激カニ強キ風ガ右舷「バウ」

信号竿ノ方カラ来マシテ船カ浮標ヲ初メ左舷ニ見テ居

ツリガ右舷ニ見ル様ニサ防サレマシタ浮標ノ傳馬モ思フ様

ニ漕ゲマセン様ニホリサシモ由カナクナリマシタカウ直ニ右舷

錨ヲ投入シマシテ「ケーブル」ヲ引ツ位止ハシマシテ船ガ向

0312

立ッカ立ッカト腕レテ居マシヨガ一向風立ッ横子がナリ却
ッテ流サレテ居ル一ガ分リマシタ然レシムデフケールレテ居バ
ストル俵サ落サレテ行ッテ臆レ触突レシノーデモアウマスカラ
止ルナリ直カニ右進一杯ヲ命レ面舵十五度、取りマシタ
後進カキ、効ソクト思フト合時ニ左舷ノ便所ノ向ハ
ノ船ヲ接触シマシタ船ハ其俵右進デ囀ッ代ッテ出
テレマイマシタ

同、其浮標ノ處テ停止シタヤノ風ノ模様如何

答、風向ハ正横デ風ノ向ッテハ呼吸ガ出来ヌ、前甲板多
ハレレレ、ツカマッテ身ヲ支ヘル位デアラシタカ囀ノ側ヲ通
ルナリ横ヲ向ケバ呼吸ガ出来マシタ夫レデ風力カク強ク

馬にマレタノデス

聞、今日も其の傍に時ヲ考へテドウスレバヨカクマカト思フカ

答、其の傍に入ラスと大漢の傍に碇泊スレバ取良ト思ヒマ

スガ其の傍の時其の傍に置キテカウ風ハ余り強ク感シマセシデシ

タカウ全ク繫留ノ出来ナイ天候トハ思ハレマシデシカウ今

考へテモ釣ンドウトモ思ハレマセン

右之通り相違無之候也

明治四十二年五月廿六日

海軍上等兵曹中島長次郎 (中島)

(東京北村納)

0314

明治四十二年四月廿五日北洋海軍艦隊事件調査同調書

北洋海軍艦隊事件調査同調書

四月廿五日北洋海軍艦隊事件調査同調書

同、汝が職務ハ何ナリヤ

答、北洋海軍艦隊事件調査同調書

同、接融當時ハ何ヲ為シ居リヤ

答、中島上等兵トシテ船橋ニ居リマシタ

同、其時何ヲ見入リテ接融点ノ経過ヲ詠セ

答、其時何ヲ見入リテ接融点ノ経過ヲ詠セ

方ニ向イテ居リテ思ハシメタソシテ本船ノ浮標ヲサ

0315

シテ左舷に見テ進ニテ行キ曙ノ色ヲ見座ニシ風が強カク
為ニ曙ヲサシ越シト思フ頃ニ連シテ浮標ヲ左舷ニ
見テ向テ止マシテ知港部ノ傳馬が丁度浮
標ノ向ニ左側ニ撃ヒテ居リシカ船が傳止ニテカラ「ブイ」
近ク中ニ強ク下向カ来マシテ船が左舷ニサテサレタ為メ
ト風が強ク為リ傳馬が思フ損ハ近クツイテ是ラセシテシタ
カラ「ホーサ」ヲ取り損ニテ直ニ右舷船ヲ投入シシカ
船ハ風ニまきスル身代風下ニ落サレテ本船ノ左舷ノ便所
ノパイプノ底ニ触レシタ其向風ハ中々強クテ是ツ
テ居レシ位ナシタ

右ニ通相違無之候也

明治四十二年五月廿六日

海軍一等兵曹及川甚老



海軍

(東京北村納)

0317

明治四十二年四月廿日洋丸接触事件査問調書

洋丸島根海軍事務長松五郎

四月廿日洋丸と船と接触事件の付尋問ス

同、入港用意、ナラテカウ如何セシヤ

答、配置テスカウ亦甲板、出テ錨作業と徑事トナシタ

同、錨、如何、用意セシヤ

答、左舷錨鎖ヲ錨カラス高シテ繫留用意タシ右舷錨ヲ投入

ノ用意トナシタ

同、入港後洋丸如何、進航セシヤ

答、曙ノ手前次ヲ半床ニ成リマシテ後テク床トナラセシタ浮

0318

標ヲ左舷に見テ停止シマシタ

同、モヤイノ傳馬ハ如何

左、本船「ブイ」に繋ホイテ居タ舟夫が四名に居リマシタ本船

加、飯口サカサレヨカラ「サト」ドレットトテ傳馬に滑リマシタが巨高

加、少シ遠クイト風ノ強イノテ届キマセシ其中ニ右舷錨

入レノ号令がアウマシヨカラ右舷錨ヲ投入シテ「ケーブル」ノ

試ツル「マーク」クシテ「ウインド」ラス「止」ノマシタ

右ニ通相違無之也

明治四十二年五月廿七日

海軍三等兵曹松元松太郎



東京北村納

0319

明治四十二年四月十日世澤丸接触事件査問調査書

知港部勤務海軍三等主計 佐藤修三

四月十日世澤丸ト觸ト接触事件付尋問ス

同、世澤丸入港ノ際ハドウシテ居ウタカ

答、堀上守兵衛が外出スルマシテ出向テアリマシタカラ、公認ノ

入港ノ際ハ常ヨリモ風が強キ爲メ舟夫ヲ四名遣リマシタ

常ニ然ル又ハ参考テヤソテ居リマス用ガアソテ室内ニ居

入シ居ルニ其何ノ様子ハ一寸分リマセガ其何ノ室外ニ居タト

キ投錨シタ音ヲヤキマシタ

同、世澤丸ノ接触ノ模様ハ見ナカシタカ

0320

答、慮ヲテ能ク分リマセシメシタ

同、當日ノ内ハドウデアウメト思フカ

答、當日ノ天候ハ朝カウ(セハ時段)悪クナリマシテ少シク

ノ来日時合ハ一層悪ルノ内モ大分アウマシタ

右之通相違(無)之也

明治四十一年五月廿五日

海軍三軍兵曹

近藤修三

明治四十二年四月廿日世澤丸接触事件査問調書

知港部舟次 佐々木勝介

四月廿日世澤丸ト腕ト接触事件、付ヨ尋問ス

向、世澤丸ノ入港ノトキハ、何ヲ爲シ居リヤ

答、モヤイ傳馬テ出テ居リマシタ

向、世澤丸入港后如何ニセシヤ

答、世澤丸ガ「ブイ」ト「ツイ」テ来マシタガサレテ風下ニ落

サレテ「ブイ」サ「遠」ザル様子デスカラ「ホー」サ「レ」テ「返」ハシテ今

船ト向ツテ来テ人デ漕ギ行キマシタガ「ホー」サ「レ」ハ「白」米「突

ノ長」サ「レ」タガ「皆」止「バ」シ「マ」シ「タ」ガ「返」ハ「ス」丈「ケ」皆「沈」ミ「マ」シ「タ

此風か急ぐ強うなりまし故傳いテ行くとが出来マ
セテしうソウシテゆ海丸かう「サド」ヲ投ケラシ
マシタが急キマセし且中ゆ海にた船ヲ投入シマシ
タ

向、其回世海に如何にナリシヤ

答、風が強うテ帰らぬ見ゆがアウマセテしうかう「ブイ」繫

ムか徒見テ居らましが「船」合リマセテしう風が弱うナ

リテから帰ッテ来マシタ

右之函相違無之也

明治四十二年五月廿五日

舟夫

佐藤勝也

東京北村納

0323